

## 「和歌」から「散文叙述」へ―「地の文」に融合する引歌

―『土左日記』から『蜻蛉日記』・『源氏物語』への補助線―

東原伸明

## はじめに―和歌の技法と散文学への応用

和歌の地位を「文学」として漢詩文と同等の地位にまで高めた立役者は、周知のように紀貫之という歌人である。彼は勅撰集『古今和歌集』の撰者代表として、後世には「歌聖」という和歌の神様にまで祭りあげられている。しかし、彼は歌人としてだけでなく、初期の散文学である『土左日記』の著者でもあり、散文の作家でもあったという側面は、もっと評価されるべきではないだろうか。同様に、女流日記の始発となった『蜻蛉日記』の著者、道綱母も歌人であった。ともに歌人であったという点、より重視されなくてはならない。和歌に比して後発のジャンルである散文学が、集大成ともいえるべき『源氏物語』が登場するまで、このような「歌人＝散文作家」の手によってその作物に和歌の技法を取り込むという、散文の叙述完成のために模索の過程があったのである。

小稿では、初期の散文学である『土左日記』の有する散文の叙述性の再検討を通し、『蜻蛉日記』で確立したとされる「引歌」の技法に焦点を合わせ、その完成形『源氏物語』に向けて補助線を引いてみたいと思ふ。

## 1 散文叙述の模索―三人称叙述の意義・日次と回想の時間

紀貫之は、『土左日記』という作物の執筆を通し、仮名による散文叙

述の特性を実験実践的に発見して行ったものと思われる。

周知のように『土左日記』の冒頭は、

男もすなる「日記」といふものを、  
（女もしてみむ）とてするなり。  
（22頁）（1）

となっており、前国守の身辺に伺候していると思われる女性の立場から一人称の叙述が為されている。しかし、この一人称の自己は、『土左日記』の記述者ではあるものの、当該作物の主人公ではない。主人公は、

ある人、  
（あがた）  
（よとせいつとせは）  
例の事ども皆し終へて、……  
（22頁）

とあつて、紀貫之を想起させる前国守を「ある人」という三人称で叙述しているのである。しかも、この「ある人」は、場面に拠つて「翁」「船の長しける翁」「船君」等と呼称を換え叙述が為されている。また、この「ある人」の呼称は、複数出現しているが、そのすべてが前国守を指し示する記号でもない。（2）

『土左日記』という虚構の散文の作品を綴る意義というものを考えてみた場合、三人称の呼称を用いて作品を書き進めることにより、作中の自己を分裂させ、増殖させ、対極的な自己を生成させる。それは新たに自己の分身を創り出すという楽しみであり、貫之自身執筆という行為を通し散文の叙述の方法として発見したものであろう。（3）自己を分裂させる楽しみは、統一された単一主体の韻文（和歌）にはなく、散文の叙述にだけあるのであり、これは散文叙述の特性である。

女流日記の始発の位相にある『蜻蛉日記』の序にも、

かくありし時過ぎて、世の中にいとものはかなく、とにもかくにもつかで、世に経る人ありけり。……

(小学館新編日本古典文学全集 上巻 89頁)

とあつて同様に三人称で、著者の分身を表出している。こうした三人称による自己表出はまた、『蜻蛉日記』成立前後数十年間の私家集の詞書、その冒頭にも顕著に見られることであつた。(4)

・寛平みかどの御時、大宮す所ときこえける御つぼねにやまどにお  
やある人さぶらひけり、……  
(伊勢集 45頁)

・おやのいとよくかしづきける人のむすめありけり、……  
(篁集 142頁)

・いつばかりのことにかありけん、(世をのがれてこころのままにあ  
らむ)とおもひて、世のなかにききときく所をかしきをたづねて  
心をやり、かつはたふときどころどころをがみたてまつり、(我が  
身のつみをもほろぼさむ)とある人有りけり、「いほぬし」とぞい  
ひける、……  
(増基法師集 161頁)

・おぼえおはしけるかむだちめ師補の次郎なりけるひと、兼西年十八天慶五ばかりな  
るが、おぼえいとかしこかりけれど、かうぶりえぬ有りけり、……  
(本院侍従集 173頁)

『蜻蛉日記』の「世に経る人」という三人称叙述について森本元子は、「篁集は篁日記とも称された。伊勢集の冒頭部分は伊勢日記ともよばれる。／蜻蛉日記は、このような冒頭文が流行した時代の作品で、序文の記述はその流行に乗つたものといつてよい。三人称的な叙述で書きはじめられるものだが、いつのまにか筆は一人称になつてゆく正直さがおも

しろい」と評している。(5)

当該作物の三人称叙述が当時の流行に乗つて為されたものかどうか判然としないが、私家集の「詞書」の部分すなわち、「地の文」には、著者の分身たる自己を三人称で表出しようとする動きが見てとれる。これらは、歌人作家たちによる散文叙述への模索ともいふべき行為であるといえよう。すなわち、「和歌」から「散文叙述」へ。それらはまた、「虚構」への意思ともいふべきものである。

『蜻蛉日記』はこのように「かくありし時過ぎて、……世に経る人ありけり」と過去の自己を回想する時から開始しており、その点、日次の現在の時間からリアルタイムに綴つていた『土左日記』とは確かに異なる方法論である。しかし、『土左日記』の日次はあくまでも、真名(漢字)の日記の様式を模倣的に踏襲したものに過ぎない。例えば、

廿七日。大津おおつより浦戸うらとを指さして漕こぎ出いづ。

かくあるうちに、(まやう)京みやこにて生うまれたりし女子をむなご、くににて俄はかに失うせにしかば、この頃ころの出いで立たちいそぎを見みれど、何言なにことも言いはず、(まやう)京みやこへ帰かへるに、女子をむなごの亡なきのみぞ悲かなしび恋こふる。ある人々ひと々もえ堪たへず。この間あひだに、\*ある人ひとの書かきて言いだせる歌、  
3 都みやこへと思おもふをもの悲かなしきは帰かへらぬ人ひとのあればなりけり  
また、ある時ときには、

4 あるものと忘れわすれつつなほ亡なき人ひとを何いづらと問とふぞ悲かなしかりける  
(24〜25頁)

日次としては、明らかに十二月二十七日の出来事であるはずなのだが、少なくとも「また、ある時には」は、二十七日の時間帯の出来事ではなからう。二十七日より後の日の出来事であるだろう。あるいはまた、

十四日。暁より雨降れば、同じ所に泊れり。

船君、節忌す。精進物無ければ、午刻より後に、楢取の昨日釣りたりし鯛に、銭無ければ、米を取り掛けて、落ちられぬ。かかること、なほありぬ。楢取、また鯛持て来たり。米、酒、しばしば呉る。楢取、気色悪しからず。

(35～36頁)

も、日次としては一月十四日の出来事であるはずなのに、「かかること、……」以下の叙述は、十四日以降の出来事ではなくてはならない。図らずも『土左日記』の叙述が、形式のみ日次を採用したにすぎず、現実には回想の時間帯から叙述が為されていることを暴露してしまっているのである。『土左日記』の次の日記文学として、『蜻蛉日記』が回想の時間帯を採ったことは、このように見てくると、ある意味においては必然であったともいえるだろう。

さて『竹取物語』、『うつほ物語』、『伊勢物語』、『落窪物語』という作り物語の流れ、『土左日記』、『蜻蛉日記』という日記の流れ、これら散文文学の流れは、完成形の『源氏物語』へと合流集成される。

散文文学の完成形と目される『源氏物語』の言説は、「地の文」「会話文」「内話文」「草子地」「手紙文」「移り詞」「自由間接言説」「自由直接言説」等から構成されている。

振り返って初期散文文学というべき『土左日記』の言説の構成を鑑みるならば、不完全ながらも一応、『源氏物語』の言説に相当するものが出揃っていたとはいえるのではないか。(6) 小稿では、以下、「地の文」に融合する引歌にこだわって論じてみたい。

## 2 『源氏物語』の「地の文」に融合する引歌

佐藤恒雄によれば一般に引歌とは、「散文おける表現技法の一。散文中に古歌や同時代の人の歌など既成既知の歌をふまえることによつて表現を重層的・効果的にする手法、またその時ふまえられている歌そのものをいう」とする。またその手法は、「大きくは、引歌であることがはつきり示され、その歌によらなければ文意が理解できない場合と、引かれた古歌の部分が前後の文脈に溶け込んで、それに気づかなくても理解に支障のない場合とがある」という。(7)

鈴木日出男は、そうした引歌の技法の萌芽は『伊勢物語』や『土左日記』の既成和歌の引用例に求められるが、引歌として断片的な歌句の提示に歌全体を委ねながら散文中に取り込められるようになるのは、十世紀後半の『うつほ物語』・『落窪物語』、『蜻蛉日記』などであったという。さらに前二者には対話・消息という実際のコミュニケーションにか現れないのに対して、後者『蜻蛉日記』において引歌が、初めて「地の文」に現れるようになったのだという。(8)

木村正中も、和歌の技法が散文に応用される素朴な引用形式の始原を『土左日記』に求めており、次代の『蜻蛉日記』との決定的な差異を説いている。(9)

……この「羽根」といふ所問ふ童のついでにぞ、また昔へ人を思ひ出でて、何れの時にか忘るる。今日はまして、母の悲しがらるることは。下りし時の人の数足らねば、古歌に、「数は足らでぞ帰るべらなる」といふ言を思ひ出でて、人の詠める、

16世の中に思ひやれども子を恋ふる思ひにまさる思ひなきかな  
と言ひつつなむ。

(34～35頁)

当該「古歌」とは、「北へ行くかりぞなくなるつれてこしかずはたらでぞかへるべらなる」(古今和歌集巻第九、羈旅歌、四一二、題しらず、よみ人しらず)であるが、木村正中は、「貫之が土佐で亡くした愛児を悲しみ偲ぶ気持を表わすのに、この古歌が引合いに出されている」が、「下りし時の数たらねば」という、その時の情景と、「北へゆく」の古歌とが、それぞれ独立的に把握されており、一方は作者の主観的認識、他方は作者から切り離された客観的な観念の世界に属し」ており、「このような場合は、一般には引歌の中に入れてはならない。というのは、引かれた古歌が、文脈の形成要因として、構造的な意義を担うことなく、文字どおり古歌のままに文脈の中に位置づけられてしまっているから」で、「蜻蛉日記には、この土佐日記の例のような形で、和歌を引いた箇所が一つもない」という。

例えば、書き手の道綱母は兼家と結婚間もなく、彼は町の小路の女の許に通い始め彼女にすっかり熱を上げてしまふに至り、不信と嫉妬に煩悶している頃の記事には、次のようにある。

かくて、つねにしもえいなびはてで、ときどき見えて、冬にもなりぬ。臥し起きはただ幼き人をもてあそびて、「いかにして綱代の氷魚に言問はむ」とぞ、心にもあらでうちいはるる。

(天曆十年冬・上巻108頁)

傍線部は、「いかで猶あじろのひをに事とはむなによりてか我をとはぬ」(拾和歌集巻第十七、雑秋、一一三四、藏人所にさぶらひける人の、ひをのつかひにまかりにけるとて、京に侍りながらおともし侍らざりければ、修理。

大和物語 第八十九段 修理の君を引いている。一見、前掲『土左日記』と同様に見えるが、当該例は、「そうしたみずからの主体的真実を、「網

代の氷魚」の和歌を媒介としてここに客観化する。この和歌を通して、道綱母の心境がはじめて明確な形をとりえたわけだが、それと同時に、この和歌が、彼女のまさに個体的心情に裏打ちされて、新たに生々と蘇ってきているといえよう。そのような関係は、土佐日記における和歌引用がついにもちえなかつたところである」と、木村はいうのである。(10)ただし、当該例は、「……とぞ」という引用符を伴っているように、小稿の標的とする「地の文」に融合する引歌ではない。ところで「地の文」に融合する引歌の語は、管見によれば秋山虔の論に用いられたのが最初のものである。(11)

秋山は「地の文に融合する引歌表現の方法は『蜻蛉日記』において創始されたものであり、いわばそれは『蜻蛉日記』の文章の特記すべき一様式と考えてよいだろう」とし、「和歌のイメージ、和歌のことばに吸引されて作者の内部経験が意識化される、と同時にその和歌のイメージ、和歌のことばに新たな意味を再生産して文脈の展開する場が形成される、そのような表現方法としての地の文に融合する引歌表現による文章作法、道綱母の創造したこの散文の方法は、一つの様式として『源氏物語』の文章に完熟するものである」としている。

そのような引歌の例として、私が反射的に想起するのは、『源氏物語』「野分」巻、夕霧が恋人の雲居雁に宛てて手紙を書く場面である。

六条院に襲来した猛烈な台風の翌朝、光源氏は子息の夕霧に命じ、四季の町、それぞれの愛妾たちへ風見舞いをさせている。夕霧は父光源氏と紫の上の閨における睦言を立ち聞きし、また、姉だと思っていた玉鬘と光源氏の狂態を垣間見るにつけ、鬱々とし、彼は自身の本来の恋人である雲居雁に宛てて、風見舞いの手紙を書くのである。

紫の薄様なりけり。墨、心とどめて押し磨り、筆のさきうち見つ、

こまやかに書きやすらひたまへる、いとよし。されど、あやしく定まりて、憎き口つきこそものしたまへ。

夕霧 風さわぎむら雲まがふ夕べにもわするの間なくわすられぬ君  
吹き乱りたる刈萱につけたまへれば、人々、「交野の少将は、紙の色にこそとのへはべりけれ」と聞こゆ。夕霧「さばかりの色も思ひわかざりけりや。いづこの野辺のほとりの花」など、かやうの人々にも、言少なに見えて、心解くべくもてなせず、いとすくすくしう気高し。……  
(小学館新編日本古典文学全集 ③283頁)

一般的解釈では、誠実でいろ好みの性格ではない夕霧が、恋文は料紙の色と折枝の色の調和を図らなければならぬという常識すら弁えず、そのことを女房たちに注意され、謙虚に反省しているというふう理解されているようだ。しかし、そうした通説に反し新編全集の注だけが、特異な読みを提示している。傍線部「吹き乱りたる刈萱」を引歌として認定しているのは、小学館(旧全集も)の注釈だけである。頭注二六は端的に、

「まめなれどよき名も立たず刈萱のいざ乱れなむしどろもどろに」  
(古今六帖・六)による。あなたと寝て思いきり乱れてみたい、の意をにおわせた。

と説いている。「吹き乱りたる刈萱」の一文を単に地の描写だとは理解せずに、「地の文」に融合する引歌として認定することで、夕霧の無意識的な欲望が浮き彫りにされることになる。そして夕霧の「さばかりの色も思ひわかざりけりや。…」は、女房たちを前にして発せられた「会話文」(ダイアログ)であり、「内話文」(モノログ)ではない。同頭注二九も、「女房に合わせて自嘲的な口ぶりであるが、相手へのお愛想である。内心「まめなれど」の歌も知らない女房たちを軽蔑している」の

だとする。小賢しく注意を与える女房たちは、「軽薄で無知」(頭注三)な存在なのだろう。

この場面をどのように読むか、読まないかその判断が、「地の文」に引歌が現象するか否かの境目である。その判定は、読者の感性に任せられていると言えるだろう。だから「地の文」に融合する引歌が「在る」かないかではなくて、引歌に「成る」かならないかである。「地の文」に融合する引歌は、読者の読みによって現象するものなのである。(12)

### 3 『蜻蛉日記』序跋の「地の文」に融合する引歌

前掲の鈴木日出男論文は論の冒頭に、『枕草子』「宮にはじめてまゐりたる頃、…」(三巻本では、第七十六段、新潮日本古典集成72頁)の一節を引用し、中宮定子周辺宮廷の洗練された言語生活として、男女社交の場に引歌の技法が用いられていたエピソードを紹介し、「清少納言をして物語的だと感動せしめた機知の言葉」だという指摘をしていた。

これに対し高橋亨は、「逆に日常会話の引き歌が物語の影響をうけた面を示すものである。ここでは、物語や日記を〈書く〉表現において、引歌の発達が急速になり、転換したという視点を強調しておきたい。とりわけ地の文に融合した引歌の方法は、現実の言語生活とは別の書く表現の位相にあるもので、会話の反映とはいえないのである。引歌は高度に変形され散文化されることによって、歌ことばの規範意識をもとにした伝達さえも、ほとんど不可能にしてしまう場合があり、冒頭文の例などはそれに近いのかもしれない」と説いていた。紙幅も限られているので、高橋亨の先駆的な研究の成果に従い、『蜻蛉日記』の序跋における「地の文」に融合する引歌の例を確認してみよう。以下、引歌の指摘は、

高橋亨による先駆的な研究成果であり、現行の諸注釈にはほとんど触れられていないものである。(13)

① かくありし時過ぎて、世の中にいとものはかなく、② ともかくにもつかで、③ 世に経る人ありけり。④ かたちとも人にも似ず、⑤ 心 魂もあるにもあらで、かう⑥ ものの要にもあらであるも、  
へことわり)と思ひつつ、ただ臥し起き明かし暮らすまに、⑦ 世の中に多かる古物語のはしなど見れば、⑧ 世に多かるそらごとだにあり、人にもあらぬ身の上まで書き日記して、めづらしきさまにもありなむ、(天下の人の品高きや)と問はむためしにもせよかし、とおぼゆるも、過ぎにし年月ごろのこともおぼつかかりければ、さてもありぬべきことなむ多かりける。

(新編日本古典文学全集 上 89頁)

①は、「世中はかくこそ有りけれ吹く風のめに見ぬ人もこひしかりけり」(古今和歌集卷第十一・恋歌一、四七五、題しらず、つらゆき)を指摘し、高橋は「その深層から、下の句の「目に見ぬ人」を恋う少女時代のイメージがよび起こされる。そうした若い日々が過ぎ去つてと、対比的に現在の自己が提示される一文として解釈されるべきである」とする。②も「世中はうき物なれや人ごとのともかくにもきこえくるしき」(後撰和歌集卷第十六・雑二、一一七六・一一七七、題しらず、つらゆき)を指摘。③は小野小町の「花の色はうつりにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに」(古今和歌集卷第二・春歌下、一一三、題しらず、小野小町)を「連想すれば」④の「かたちとも人にも似ず」という次の語句が生きてくる」という。また③には、年が改まる度に容色の衰えを悲しむ引歌として跋文にも引かれる「ももちどりさへづる春は物ごとにあたらたまれども

我ぞふり行く」(古今和歌集卷第一・春歌上、二八、題しらず、よみ人しらず)も踏まえられている。⑤の「心 魂」は「歌ことば」として理解すべきではなく、『蜻蛉日記解環』が指摘するように、「顔かたち・心 魂・身の才、人にすぐれ」(『うつほ物語全 改訂版』藤原の君 巻頭、おうふう 67頁)を「翻案」したものだという。「自分は物語主人公たちのように才色兼備ではないからと、ここにも対照法による誇張がある。その心的なゆりかえしが、「古物語」の「そらごと」と対照した「日記」の表現行為へと逆転している。宇津保物語は蜻蛉日記と同時代の作品であるが、理想化や「そらごと」に関しては「古物語」を継承している。それをあえて「古物語」に含める意識を読めば、とりもなおさず、物語そのものへの批判ということになり、「昔物語」と別して「物語」でさえないかに自称する源氏物語へと通ずる」と高橋は説くのである。⑥は『伊勢物語』、東下り昔男の無要ものの意識を喚起する。⑦と⑧は同語反復の一種として、「対照法的に思考を表現する文脈において、修辭的な要素とみることが、この日記の文体の形成につながる問題」なのであるという。

さて次に、跋文をみよう。ただし、跋文の引歌は諸注において既に指摘されているものである。

かく年月はつもれど、思ふやうにもあらぬ身をし嘆ければ、⑨ 声あらたまるもよろこばしからず、なほものはかなきを思へば、⑩ あるかなきかのこちする「かげるふの日記」といふべし。

(上巻 167頁)

⑨は序の③にも引かれていた「ももちどり…」の和歌により、「我ぞふり行く」が利いてくる。

⑩は「あはれともうしともいはじかげろふのあるかなきかにけぬるよなれば」(後撰和歌集卷第十六・雑二、一一九一・一一九二、題しらず、よみ人しらず)、「世のなかと思ひしものをかげろふのあるかなきかのよにこそ有りけれ」(古今和歌六帖第一、八二〇、かげろふ)、「かげろふのあるかなきかにほのめきてあるはあるとおもはざらなむ」(宇津保物語、一としかげ、七、女(後蔭女))。もう一首、「世中といひつるものかかげろふのあるかなきかのほどにぞ有りける」(後撰和歌集卷第十八、雑四、一二六四・一二六五、題しらず、よみ人しらず)を、今回追加として指摘しておく。

高橋亨は、「「かげろふ」の実体は陽炎(野馬)であると思うが、糸遊、あるいはトンボの一種をさすこともあったにせよ、すでに歌ことばとして自立し、「あるかなきか」という仏教的無常観と呼応する存在感覚をよびおこすことが大切であろう」としている。

以上、高橋亨の研究により、「地の文」に溶融融解していたと思しき引歌が発掘された。深層の和歌のことばの作用により、表層の散文の叙述が生成されている様が浮き彫りにされた。「地の文」に融合する引歌は、このように読み手の解釈により現象するものであるから、研究の現在からは、引用Ⅱテキスト論的な視座から論ずるべきであろう。

#### 4 『土左日記』における「地の文」に融合する引歌再検討(萌芽)

「地の文」に融合する引歌の例を、『蜻蛉日記』と『源氏物語』によって確認してきた。それらを踏まえ振り返ってみた時、『土左日記』にはその萌芽すらも無かったと、果たしていえるのだろうか。次の例などは、まさに「地の文」に融合する引歌、その萌芽といえないだろうか。

さて、十日あまりなれば、月おもしろし。船に乗り始めし日よ

り、船には紅濃くよき衣着ず。それは、「海の神に怖ぢて」と言ひて、何の葦蔭に託けて、老海鼠のつまの貽鮓、鮓鮓をぞ、心にもあらぬ脛に上げて見せける。(二月十三日 35頁)

傍線部「脛に上げて」を、諸注「いつしかとまたく心をはぎにあげてあまのかはらをけふやわたらむ」(古今和歌集卷第十九、雑体、一〇一四、七月六日のたなばたの心をよみける、藤原かねすけ朝臣)との関わりにおいて理解されており、通説と言つてよいだろう。したがって問題は、その関わり方である。

萩谷朴の「評」は、「◇諸諺効果・春思啓発」の趣旨として、縷々説いている。(14)

……とるにも足らぬ去年の枯れ葦のむら立ちに心を許して、秘すべきところをも包まずに水浴をしている。頭隠して尻隠さぬ矛盾したおかしさを、あわてた彦星の床急ぎを詠じた兼輔の俳諧歌の向こうを張つて、「またく心」ではないが、それと同様に脛を上げてみせたと、ユーモラスに表現したのである。この引き歌は、通り一ぱんの読み方では気のつくものではない。貫之も恐らく、読者の誰しもがそのいたずらに気が附くものとは予想してはいなかったであろう。むしろ、誰にも気づかれぬところで、作者がひとりほくそえんでいる老獪さをさえそこに見出すのである。

少なくとも萩谷の解釈においては、「地の文」に融合する引歌の概念と合致するものとして理解してよいだろう。

ただし、プレテキストの和歌の解釈には、小松英雄より異見も提示されている。(15) 萩谷をはじめとする通解では「詞書」の「たなばた」を「彦星」(牽牛)と解している。これは釈契沖の『古今余材抄』が「たなばた」Ⅱ「彦星」説を提示して以降、現在まで継承され通説と化して

いるようである。また、「脛に上げて」の、「脛」ということばの語感  
はジェンダーとしては女性のものであり、「織女星」が女だてらに裾を  
捲り上げ、「脛に上げて」天の河原を渡ろうかと思索しているからこそ  
俳諧歌たりうるのである。ちなみに異本の元永本『古今和歌集』は「た  
なばた」を、「織め」と表（エリツメ）記しており、「織め」＝「織女」ならばタ  
ナバタないし、タナバタツメと読解できる。

プレテクストとしての「詞書」、「七月六日織め」をよめる」（元  
永本）あるいは、「七月六日たなばたの心をよみける」（定家本）も、  
私見では、詠み手の兼輔が「織女」の立場からこの歌を詠んだものであ  
り、したがって「女歌」と解すことができる。引用されるコンテクス  
トの『土左日記』とは平仄の合った、「女性仮託」となる。現代語訳を  
試みるならば、つぎのようになろうか。

とるに足らない葦の蔭に託けて老海鼠の相方の貽貝の鮎だの鮎鮎を  
さ、うかつにも（七夕の前夜、逸る気持で天の川を渡ろうかと思案  
する織女星の女心ではないが）、思いがけず（裾をまくって）脛と  
ともに、（海の神に）見せてしまったことだ。

『源氏物語』言説次元の、「地の文」に融合する引歌が『蜻蛉日記』  
執筆によって確立したことは確かである。しかし、その始原ともいうべ  
き技法の萌芽は、既に紀貫之により実験がなされており、『土左日記』  
の段階で用意されていたものと理解したいところである。

注

(1) 『土左日記』の本文の引用は、東原伸明＋ローレン・ウォーラ  
ー編『新編 土左日記』（おうふう、二〇一三年）。

(2) 『土左日記』は、貫之を思わせる前国守を「ある人」と叙述し  
ている。それは現実の作者、著者である紀貫之を実名で「貫之」と

表記しないための方法である。「ある人」の用例が、必ずしもすべ  
てが「貫之」を指示している記号ではない。「ある人」という語が、  
匿名の「或る人」を指示している語でもあるのみならず、「ある人」  
「貫之」という正反対の用例も、二例ほど見られるのである。東原  
伸明「二童」の性は男か女か？初期散文叙述の特性検証」（『土左日  
記虚構論—初期散文文学の生成と国風文化』武蔵野書院、二〇一五年）。

(3) 日記の前半部分では著者である紀貫之を想起させるように、和  
歌の権威者としての人物造形が為されているのに対し（一月七日）、  
後半においては（二月七日）、「かかる間に、船君の病者、本より  
こち々しき人にて、かうやうの事、さらに知らざりけり。かかれ  
ども、淡路専女の歌に賞でて、都誇りにもやあらむ、辛くして、奇  
しき歌捻り出だせり」（54頁）とあって、彼は本来風流を解さない  
人と和歌などはまったく知らない、紀貫之とは正反対の人物造形  
が為されており、同一人物とは思われないほど人格が分裂破綻して  
いる。しかし、この分裂こそ『土左日記』のほんとうの書き手であ  
る著者、紀貫之が獲得した叙述の方法なのではないか。

(4) 私家集の引用は、『新編国歌大観第三卷 私家集編I』（角川書  
店、一九八五年）。ただし、「内話文」に相当すると思われる部分  
には山形括弧「」を、「会話文」には鉤括弧「」を付けるとい  
う加工を施している。

(5) 森本元子「蜻蛉日記の女流文学史的位置」（『一冊の講座 蜻蛉  
日記 日本の古典文学I』有精堂出版、一九八一年）。木村正中「蜻蛉  
日記における私家集的性格について」（『中古文学論集 第二卷 蜻蛉  
日記（上）』おうふう、二〇〇二年、初出一九六九年三月）も、『蜻  
蛉日記』の「成立には、その核となった詠草とメモがあり、それは  
多分に私家集的性格をもったもの」という推測をしていた。



(6) 注(1)の共編著、および東原伸明『土左日記』の言説分析  
〔『土左日記虚構論—初期散文文学の生成と国風文化』武蔵野書院、二〇一五年)を参照。

(7) 佐藤恒雄「引歌」〔『日本古典文学大辞典 第五卷』岩波書店、一九八四年)。

(8) 鈴木日出男「引歌の成立—古今集規範意識から仮名散文へ—」〔『古代和歌史論』東京大学出版会、一九九〇年。初出一九七五年八月)。  
同論で鈴木は、『うつほ物語』・『落窪物語』、そして『蜻蛉日記』の引歌の引用形式を次のように分類している。「I」散文+引歌  
(引用伝聞形式を伴う)「II」和歌+引歌(引用伝聞形式を伴わない)「III」散文+引歌(引用伝聞形式を伴わない)ただし、小稿の標的とする「地の文」に融合する引歌は、文字通り「地」に融合するものなので、この分類の埒外である。

(9) 木村正中「蜻蛉日記の文体—引歌について—」〔『中古文学論集 第二卷 蜻蛉日記(上)』おうふう、二〇〇二年、初出一九七一年一〇月)

(10) また当該例を、注(8)の鈴木日出男論文も、「心にもあらでうち言はるる」この言葉は、「無意識のうちに口をついて出たのであり」、「幼き人をもてあそびて」憂悶をまぎらわしていた意識の底があらためて呼びさまされる体のものであり、「言葉があたかも自転しながら深層を掘り当てるかのようでもある」といい、「無意識が掘り起こされるといふ作用は、必ずしも作者の実際的な体験によるのではなく、「作者が書かれる自己の情動をとりおさえているにはかななるまい。作者はそうした文脈がおのずから形成されるべく和歌の言葉为契机としていたのであろう」とする。

(11) 秋山虔「蜻蛉日記の文体形成—地の文に融合する引歌について—」(上)村悦子編『論叢王朝文学』笠間書院、一九七八年)。

(12) 深澤徹『蜻蛉日記』の散文表現と文体—和歌との対比から—

〔『女流日記文学講座 第二卷 蜻蛉日記』勉誠社、一九九〇年)は、『蜻蛉日記』の「地の文」に融合する引歌に関して、「ここでは最早その原拠をたどることすら困難なほどに(変形)され、「地の文」に完全に融合し血肉化している。だから、読者はうっかりすると「引歌」の存在に気付かぬまま、表層の読み取りに終始することとなる。要するに「古今集規範意識」を共通の基盤とする伝達の(場)さえも超え出て、踏まえられていく和歌をうっかり見落とすとその文脈をたどることすら困難な特異な文体が展開しているのである。／だとしたら、潜在する「引歌」を掘り起こす読者の側の積極的な働きかけによって「地の文」の「引歌」は、これからもその数をますます増大していくことになる。要するにこれはもう、読者による(読み)(その恣意性も含めて)の領域に委ねられた表現になってしまっているのだ」と述べている。

(13) 高橋亨「蜻蛉日記の修辞」〔『一冊の講座 蜻蛉日記 日本の古典文学 I』有精堂出版、一九八一年。なお、『蜻蛉日記』の引歌の分布傾向に関しては、上村悦子「源氏物語と蜻蛉日記 第二部 蜻蛉日記散文中の引歌について」(紫式部学会編『源氏物語と女流日記 研究と資料—古代文学論叢第五輯—』武蔵野書院、一九七六年)を参照。

(14) 萩谷朴「一月十三日 室津」〔『土佐日記全注釈』角川書店、一九六七年)。

(15) 小松英雄「古典文法で説明できない構文—一字一句にこだわって読み解く—」〔『丁寧に読む古典』笠間書院、二〇〇八年)。

(ひがしはら のぶあき・本学教授)